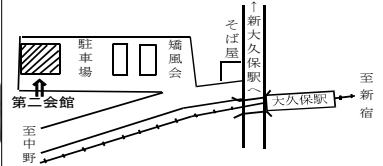


百人町教会

集会案内

礼 拝：毎週日曜 午前10時半
 於 矯風会第二会館
 聖書研究会：第1・3水曜午後7時半
 於 阿蘇 宅
 連絡先：〒112-0002 東京都文京区
 小石川 2-17-41 賈晶淳
 TEL/FAX 03-3817-7277
 E-mail kjs@gaea.ocn.ne.jp
 郵便振替：00180-8-565379



ろば

私の目線(一〇)

個々人の尊厳の手立て

河上 明

私達以外のものは全て環境である。山河草木も宇宙も銀河も太陽も、私達に影響を与えている。

過去の環境も私達独り独りの内に存在している。その様な私は私以外の全ての環境に影響を与えている。未来永劫にである。この事実は誰も否定することの出来ない科学である。一即一切一切即一の関係をもつて。環境の第一原因は神が創られたのであると。また環境それ自体が神なのであると。

ホモサピエンスと言う動物人間は、必要と偶然を繰返し、共同の場で生活を営み思いを持ち更に共通の環境から、共通の感性を持つに至った。

必要と偶然は人に極大限の脳を持たせた。人体の構造からこれ以上脳は大きくなれない。この脳は神を確信することが出来た。思いが生じ感性を持ち、神を直観し、神を見たのである。地球上の異なる環境は様々な感性を造り、それぞれの共同体を造った。異なった文化文明へと発展したのである。神への信仰のあり様も、社会生活のあり様も異なった。やがて異なった者が接触し、協調もし、対立もし、それを繰り返して乍ら二〇世紀は終わろうとしている。

一方この世紀に於いて、異なる風俗習慣、異なる心情の人達の中から、理解と寛容、共存と

共栄を強く主張する人達が世界の至る処で澎湃とひろがり始めたのも事実であった。政治経済・社会思想の主張を乗り越えて、理解と寛容の上に、それぞれの立場をお互い確認し乍ら、妥協や追従、強制や抹殺でなく、ないまぜでない、個々の確立と尊厳こそが四十五億年からの生命の根拠であり共生の正義であり神の命であると出張する。特に古来からの聖人君子聖職者の念願であります。この願いを平易に端的に余す所無く、伝い表わすならば、正しく(神を見、自我を忘じ) 仲良く(尊敬と愛に徹し) 楽しく(環境の恵みを知りつつましく平等に分ち心豊かに)の三つに尽きる。唯心唯物の論も資本主義も社会主義も、神学も哲学も人類愛への苦悩の、人類救済への思考錯誤の永い道のりであった。畢竟神の心への実践への挑戦であった。

人はまたここに、遺伝子組換え、更には人間が人間を製作する等の技術を手に入れた。この製作人間を(法律は禁止するが、永久に保証されるとは限らない)人はどう取り扱うであろうか。彼の有名な文楽の人形芝居の人形への心情は人々の良く知る処である。愛と慈しみは内なる感性の発露に外なりません。命あるものとしての人形への感性が即く、観客の感性へのうったえとなる。製作人間に対して製作者は如何なものであろうか。ものには両面がある。遺伝子組換えにしても量産と安直、嗜好の面で好ましいとも、健康に於いて不安の面がある。

情報社会を謳歌するも、知識の増が、純粹な感性の育成の糧と皆なるとは↓(一〇頁に続く)

創立三〇周年特集

「歌の中の歌」

掛井 五郎

私は、今日この百人町にすることが不思議でならないのです。私は百人町を今から一三年前に辞めております。ヨナのように私は神から遠い遠いところに行ってしまった。

現在、私は調布に住まいして、アトリエとして深大寺の近くの店舗を借りて、そこで過ごしております。毎朝、私は出掛けております。アトリエまで四〇分。そしてシャッターを開けて、ドアを開けて空気を入れ替えます。アトリエの中は電話も引いておりません。訪ねる人もいません。誰にも知らしておりません。私はそのアトリエの中で仕事を終日致します。そして、四時半頃になりますか、ざわざわして、私は帰り支度をします。終日、誰とも話しません。帰り道で、秋の空を眺めながら、夕日を眺めながら帰ります。そして野川に参りますと、立ち止まって橋の上で、鴨たちが泳いでいる姿を眺めて、家に帰ります。

家に着くのは五時です。家に五時十五分位になりますと、二歳三ヶ月の男の子が訪ねて参ります。両手に小さな、小石を握りしめて「ただいま」と言って、訪ねて来てくれます。そして私を見るなり、私への贈り物として、小石をくれます。その小石は私の宝物です。男の子が、小さな手の中に石を握りしめて、私にお土産としてくれるのです。私はこれを一つひとつ、

イヤモンドよりも、どんな宝石よりも大事にしています。そして私は、その男の子と七時ちょっと前まで、二時間弱、一緒になって遊びます。お話をします、積み木でロボットを作ったり、また僕が作ってあげたり、絵を描いたり、二時間ほど夢を見ているようです。神様とお話しているような時間です。私は、男の子とこんなに

も豊かな時間がもてるのです。それが私の毎日の生活です。私とその男の子と遊んでいる間、家内はそれはそれは美味しいお弁当を、その男の子の為に用意致します。そして、七時ちょっと前に、その家内の作ったお弁当を、お弁当袋の中に入れて、もうそれはそれは大切にそうに弁

証詞をする掛井五郎氏

当を抱えて帰って行くのです。その男の子は、誰にも渡したくないような顔して、そのお弁当を抱えて帰って行くのです。それが私の今の生活です。

この日常の生活が私にとって今、どんなに大切なときであるか、美しいものであるか。私が今日、こうした自分自身の生活を皆さんに申し上げたのは、これは自分個人の問題ではないと思うからです。そして、私は今まで急ぎ急ぎ誰かと競争するように仕事や勉強をして参りましたけれども、今、私は立ち止まって、彫刻家や絵描きでなく芸術家になりたいのです。芸術家になりたい。

弟子たちが描きましたイエス像、福音書を読みますと、いろいろな奇跡物語が出て参りますが、イエスの活動は奇跡物語に尽きると思うのです。目の見えない盲人がイエスの許を訪ねて参りましたとき、「どうしたんだ?」「目が見えるようになります。目が見えるのです。目が見えるようになった。」「何か見えますか」。イエスがその盲人に尋ねた、「木が見えます」。その盲人が最初に見た物は木なのです。木が人のようです、歩いています。大変これは重要なことです。大変美しい奇跡物語です。木が人間のようです、歩いているように。

様々な美しい奇跡物語が存在しますが、イエスの働きのいくつかをよく読んで参りますと、イエスは寂しい人です。奇跡の出来事のあと、

必ずと言ってよいくらい、イエスは「誰にも語ってはいけない」と言います。そして彼は山に登り、また寂しいところに一人で佇んで祈っておられます。どうしてあんなにもイエスは寂しい人なのだろうか。福音書を読みますと、イエスが去って行く姿、どこかで一人いる姿、寂しく祈っている姿が描かれています。そうしたイエスの孤独とは何だろうか。

私は、ふつと思うことがあります。イエスはベツレヘムに生まれ、三人の博士たちが星を訪ねて馬小屋で生まれたイエスの許にやって参りました。しかし、イエスが生まれたことによってこの世は救われたのですか。イエスが生まれたことによって、ヘロデは諸国に生まれた幼子たち、二歳以下の男の子を虐殺したのです。イエスが生まれことによって、当時の子供たちは虐殺されたのです。繰り返しますが、イエスが生まれたお陰で、当時の二歳以下の子供たちは、全て皆殺しになったのです。イエスは、自らが生まれたことによって子供たちがどのくらい殺されていたかを知っていた筈だと私は思います。アブラハムとサラとの間に生まれたイサクのことを考えます。永い間子供もなく、どうしようかと思っていたとき、神様は、イサクという笑いを彼ら二人の為に授けました。約束通り、イサクは生まれます。アブラハムは百歳、サラは九〇歳、その間にイサクは生まれたのです。あり得ないことが起きたのに、神はまた試すのです。生け贄として、犠牲として捧げなさい、と。何でしょうか、宗教というものは、イサク

を焚き火の上で、燔祭として捧げなさい、これは何でしょうか。しかし、神はそれを見て、もう分かった、その全き服従を、雄羊に代えてイサクは生き残るのですけれども、私は羊でも、生け贄として神に捧げるということは、あつてはならないと思うのです。

宗教というものは、みんなそういう意味で犠牲だとか、捧げ物という、そういう騙しの中に私たちは信仰を守り続けたのです。私は神様の御心が未だに分かりません、しかし、神様と相撲をとって信仰を守って来ましたが、私はそうした生き方は、もう辞めたい。

「神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神である」。私が聖書の中で好きな箇所ですが、死んだ神ではなく、死んだ後の葬式の神でなく、私たちの中にいらっしやる神で、聖書の中で目に見える形で教えてくれる箇所、すなわち、イエスが復活したときです。

弟子たちは弔いの為にイエスの墓を見に行つたのです。イエスの墓は空だった。暫くしますと、イエスは弟子たちの前に現れました。イエスは言った。「腹が空いている、何か食べる物はないか」。弟子たちは焼き魚の一片をイエスに差し出した。美味しいと言って食べます。焼き魚を食べるイエス。これもなんて美しい物語なのだろうと思う訳です。復活したイエスが焼き魚を食べている。それが本当なのです。愛餐とは何か。三〇年の歴史の中で、百人町では礼拝の中で食事を致します。私たちは神と共に食事をします。これは、教会の礼拝の中で週に一度だけ

するものではない。日々三度の食事でも愛餐なのです。美味しい物を食べなければならぬ。美しい食べ物を食べなければならぬ。貧しくてどんなに慎ましい食事でも、飾り立てて食事をしなければならぬ。

私はこれから、二、三年後に多分、群馬県の桐生にアトリエを構えて、そこで死のうと思えます。そこで彫刻を制作して、桐生の中で、こんなに素敵な生き方をし、こんなに美しい生き方をして死んで行つた芸術家がいたんだ、他人のように生きたい。

最後に、ユダヤの詩人ハンス・ラザールの一節を読んで終わります。

* * * * *

ゆつくりと、私は世界から出て行き、如何なる遠方よりも遠くにある風景の中へと赴く。

そして私の過去と現在、そして私の遺す物も、緩やかに急ぐことなく私についてくる。かつて誰も歩まれたことのない国へと。

ゆつくりと私は時間から出て行き、いかなる星辰よりも遠くにある未来の中へと赴く。

そして、私の過去と現在、そして、私のこれからも、緩やかに急ぐことなく私についてくる。あたかも、私がいなかったかのように、ほとんど存在しなかったように。

(十月二十九日の百人町教会三〇周年記念礼拝で

の証詞より要約)

私と教会との歩み

ふり返れば一人

私達は来年の五月に結婚三〇周年を迎える。結婚式を当時礼拝に使用していた矯風会館の小部屋で牧野牧師の下に行い、結婚式は美竹教会で挙げた。結婚した当初は妻も礼拝に出席していた。夏の修養会には二人の子供も参加していた。或る年の修養会から帰って、ピアノの練習をしていた直子が突然シクシク泣き出した。どうしたのと妻が聞いたところ、修養会で一緒に過ごしたいづみちゃんのことを思い出してのうれし泣きであった。研は6年生頃だったと思うが、学校で家の宗教を聞かれ、キリスト教と答えた報告があった。その後、妻も礼拝を休むようになり、家族の中で礼拝に出席するのは私一人となってしまった。

家庭の中でキリスト教についてことさら話したことは無いし、キリスト教を奨めたことも無い。今思うに、日曜日に私一人が礼拝に出席したり、日本キリスト教海外医療協力会の仕事で日曜日に出かけることが多く、休日に一緒に遊んでやったことがほとんど無かった。小学校、中学校の行事も全て妻まかせて、参観したことも無かった。

一昨年二人の子供はさっさと結婚した。結婚式はキリスト教式で行ったが、その後礼拝に出席したけいは無い。今は妻と二人。日曜日登山に行かないで家に居ると教会に行かないのと聞く。一緒に行こうかと答えても返事が無い。

(佐藤 忠彦)

百人町教会とわたし

亡き母が熱心な霊友会の信者だったので、物心ついた頃から母に連れられてよく集会に行っていた。その当時はまだ日本全体が貧しくて、そこで聞く話は、信仰した結果、病気が治ったとか、夫が働くようになったとか、食べられるようになったとかの成功物語が多くて、子ども心に嘘っぽくて信じるのができなかった。

その後、青山学院の二部に通うようになり、聖書の講義を受けたり、礼拝に出たりするようになり、キリスト教が少し身近に感じられるようになった。わたしより独立心旺盛でいろいろと影響を受けていた姉が美竹教会に通うようになり、その話に刺激を受けたのかもしれない。また、姉の紹介で成島宣夫さんを知り、成島さんの勤めている会社でアルバイトをさせてもらいながら、熱心なクリスチャンで個人的な成島さんの生き方を見たり話を聞いたりしたこともさらにキリスト教に惹かれた理由かもしれない。そして、何より自分に自信がなくて将来どうしようか迷っていた自分を支えてくれるなにかがほしかったのだと思う。

そういうわけで、正確な年月は忘れてしまっただが、姉の紹介でわたしはその頃の大久保集會に通うようになった。それ以来、たくさんの方と出会い、本当にたくさんのことを学んだ。キリスト教についてはまだわからないことだらけであるが、自分が百人町教会の会員であると言ふことは、いつもわたしの中で生きる支えだ。

(新谷 照子)

時を超えて

その音色を初めて聴いた時、言葉がでなかった。なんにもない一面の草原の中に一人ポツンといるような気がした。その響きは漆黒の空に瞬くようでもあった。短い旋律の総てが、私に問いかけてくる。私が今後南半球にゆくことがあったら、たった一人で空を見上げていつまでも立ちつづけるかもしれない。曲の名は「南十字星」。三十年前、美竹祈祷礼拝が始まった頃、奏楽はオルガンではなく、一本のリコーダーだった。今、息子達はその頃の私の年齢になった。しかし私と息子達の心の距離はひよっとすると三十年以上隔たっているかもしれない。人が亡くなる前、自分の一生を、走馬灯のように思いだすのだと聞いたことがあるが、今の私はそれかもしれない。年の離れた兄一人と息子一人。会話の相手がいない事が自分自身の心を内側にむかわせるのだろうか。母が間もなく九十一才になる。親不孝な娘は、母が亡くなったらどうしようと思つた事はあつたが、母が老を様々な形で呈してゆく事を想像だにした事はなかった。その兆しに気付いた時には、自分がその日をどう過すかで夢中であつた。ただ漠然と、自分が死ぬ前に息子達に信仰を残す事ができれば、私の一生は幸いであつたと思うであろうと考えただけだった。今の私は教会に連なる細い枝であるが、死ぬ前に「南十字星」を吹いて呉れた人を許すことができれば、私の人生は幸いであつたと言えるに違いないと思つている。

(藤田 幸)

歩みは続くこれからも

三〇年経った今も、「待ちに待った祈禱礼拝 初日のピンと張り詰めた空気」「真の礼拝を：という全員の目的意識は強かったが、牧師不在の中で毎週意味のある聖日を迎える大変さ、の多くの部分を担われた笹淵さん」「週報印刷を担当した尾池（現・藤田）さんと柴原（現・小島）さん」「外部の多勢の方々が私達の為にお話下さったこと」などは忘れられない。

海外留学から帰国後に加わって下さった木田献一先生の助言があり、礼拝の内容が現在のようになつた。私達が礼拝の中で話す日もあつたが、諸先生方のお話もすべて「説教」ではなく「証詞」とされ、その後の「応答」で皆が話し合うことによつて、言葉の一方通行ではない全員参加の礼拝になつた。私に順番がくるのは何年に一回という程度であるが、軽く触れただけの、ある単純作業の話に対する「応答」の意外な反応から、それが、実は社会に最も近く連なる大切な仕事であると自覚させられたことがある。その後、自分の姿勢は確実に変わった。

殆ど休まなかつた初期の頃と違い、一九九六年春に定年退職する前の十年余は礼拝参加のない生活であつたが、阿蘇先生から送られる週報や『ろば』もあり、気持が百人町教会から離れることはなかつた。その間にあつた母の入院と死、引越し、退職等、加齢に伴う環境の諸変化を楽に受け入れることが出来たのは、それまでに教会で与えられた数々の心の糧によるところが大きいと感謝しております。（古野 明美）

昔、子どもだったかれらからの手紙

先日は阿蘇先生より素晴らしいお手紙を頂き、三〇周年記念礼拝へ参加させて頂きましてありがとうございます。

さて、私が記念礼拝にて感じた事・感動した事は、私が連れていった友人（本田裕美子）への阿蘇先生の言葉です。

「来る前は、礼拝堂を想像していたでしょうが、実際食堂で驚いたでしょう。」

「でもここが私の教会です」と。そのやり取りを聞いた時私の中で感動がこみ上げてきました。自分達が開き、今日まで続けてきた教会にとても自信と誇りに満ち溢れた笑顔が忘れられません。私はその言葉を聞いて、その場に参らできた事をとても幸せに思いました。

私が子供の頃かわいがって頂いた皆さんが、私の事を藤田龍哉で有る事を気付かないのにも驚きましたが、それだけ教会へ参加しなかつた事に少し後悔しました。それだけ私も年を重ね大人になつた今、自分の信仰心について考え直してみたいと思います。（藤田 龍哉）

◇ ◇

僕は久しぶりに記念礼拝に出席出来て、河部さんとかと会えてうれしかったです。永眠者の方と一緒に礼拝が出来て良かったです。牛久（茨城）は自然が多くていい所だと思いました。

（半沢 慎介）

◇ ◇

先日は、教会の記念礼拝へ「教会っ子」としてお誘いいただきどうもありがとうございます。なつかしい顔ぶれが楽しみな所ではあります。すが、まだ、その頃は東京に不在の模様です。残念ながら欠席とさせて頂いていただきます。当日の様子が「ろば」の紙上で拝見できることを期待しつつ・・・

（井上 智恵子）

百人町教会三〇周年おめでとうございます。教会より礼拝への招待状をいただいて、百人町教会で過ごした子供のころをなつかしく思い出しました。

代々木公園（だったと思うのですが）でたまたま探したイースター、プレゼント交換をしたクリスマス。中でも清里での修養会は同世代の仲間との夜ふかしにワクワクしたことを覚えていますが、教会から足が遠のいてだいぶ時間がたちましたが、両親から教会での話しはよく聞かされていまして、自分もその中にいたような感覚を持っています。また時間をつくって礼拝に参加することができればとも思っています。

《近況報告》一人暮らしの快適さにハマっています。子供のころからごく最近までケンカばかりしていた父や妹とも、別々に暮らすようになったからか、仲良し(?)となりました。おいつ子、めいつ子の成長を見るのが楽しみです。練馬区内の福祉作業所で、知的障害を持った方の支援を職業としています。

《生きていく上でのテーマ??》それはもう少ししゅっくり考えてみたいと思っています。

(坂 真理子)

◇

◇

前略、お便りを頂き有難うございます。百人町教会の方々にはすっかりご無沙汰しておりますが、皆様お元気にしていらっしやいますでし

ようか。私に通っていた頃と変わらず今なお百人町教会が活動を続けているのを聞いて嬉しく思います。韓国の姉妹教会の方々と合同キャンプをしたのもう一八年も前のことですが、あの時親切にして頂いた方々が今頃何をなさっているのだろうと思うことがあります。私は電気メーカー、シャープ(株)で海外向けに電子部品の営業をやっています。我々にとっては電子機器を生産している会社がお客様となります。入社して八年余り少しはまともに仕事ができる様になりましたが、未だ道半ばと考えています。当日は参加することができませんが皆様に宜しくお伝え下さい。末筆乍ら皆様のご健勝と多幸をお祈り申し上げます。

(奈良市西大寺より・小池 信治)

◇

◇

この度は三〇周年記念の礼拝にご招待いただきありがとうございます。しかし当日は仕事がありますので残念ですが出席はできません。現在は結婚して埼玉県大宮市の近くに住んでおりますが、子供はなく仕事に追われて毎日を過しています。簿記学校の非常勤講師で社会人のクラスを担当しておりますので、検定試験前は今は大変忙しくても元気にやっています。皆様もどうぞお元気で、最後になりましたが三〇周年おめでとうございます。

(浅木 今日子)

創立三〇周年記念礼拝の模様
一〇月二九日、赤と黒のフォーマルウェアで久しぶりに掛井先生ご夫妻が集って下さった。子供の歌、結婚の時、復活節に良く歌う賛美歌、聖書は雅歌一章一〜四節、二章八〜一五節、『歌の中の歌』掛井先生は減多に語る事のない今の生活の様子を語られた。二才の男の子が毎日持つて来る石ころ、「これは僕にとつて大切な宝物なんだ」とおっしゃりながら箱から出してこられた。日々の食事を二人で美しく食べていると。「世に彫刻家は沢山いるが、僕は芸術家になりたい」と、数年後の桐生のアトリエでの限りない芸術家への歩みを語って下さった。
韓国からは、朴聖慈先生ご夫妻も来日。三〇年の歩みの中で蚕室中央教会との姉妹関係が、どれだけ我々の歩みの指針を教えてくれたか計り知れない。
百人町教会が大久保祈禱礼拝として産声をあげたその時、産声をあげた笹淵のぶ子さんは今二児の母。それに続く教会員の二世達へ、阿蘇先生から心優しい手紙が送られた。「行こうかなあ」「そうだったなあ」頼もしい青年、美しい娘達への成長した姿を見せてくれた。藤田君は彼女も一緒、教会をそう思ってくれた事が本当に嬉しかった。
愛餐会は、阿蘇夫妻手作りの赤飯、賈夫妻の韓国料理に朴先生のキムチ。久しぶりに来て下さった方々との語らいを楽しんだ。大上段なメッセージもなく、アットホームな集いで宴は終わった。

(小池 佐枝子)

墓前礼拝に参列して

赤尾 泰子

一月五日、私は五時に起床。素晴らしいお天気である。私はまずコーヒーを入れ車の用意をして、それから息子たちを起こした。今日は家族そろって牛久の墓地に行くのである。

夫が亡くなってから毎年一度は訪ねるのだが、いつもどこかで道に迷って、まともに行けたことはまだ一度もない。今日こそは、しっかりと道順を覚えていこうと…。

昨夜、賈先生から教えて頂いた道路の案内のメモを持って出発した。

ナビゲーターは三男、東名から首都高速、常磐自動車道、東関道…と渋滞もなく順調に進み、九時半きっかりに私たちは牛久駅東口に着いていた。まだ誰の姿も見えずいくらか不安になり、駅のターミナルをぐるぐる何度も回ってほかの人たちの到着を待った。権田さんご夫妻の車が見えたとき、やっと一息ついたのである。阿蘇先生の車には道子さんのお母様の姿も見える。その後次々と車が来て私は四台の車に挟んで貰って墓地に向かった。

墓地には総勢三〇人ぐらい、納骨堂から写真が出され前に並べられた。私は持参した夫の写真をそこに加えた。心なしか写真の顔が嬉しそうに見える。

お墓の掃除、それから納骨室の掃除。権田さんが若者二人と一緒に地下に入って埃の中で延々と掃除を下さった。私たちは上からただ水を入れたり雑巾を取り替えたりするだけで

ある。

懐かしい写真を前にし太陽の下での記念礼拝、過ぎ去った時間がまるでなかったかのような錯覚に陥る。

礼拝を終えて、阿蘇農場に向かう。そこでめいめい畑の野菜を頂いた。

11月5日・墓前礼拝を終え

しいお住まいに向かった。古い家は改装され見違えるようになっていた。中庭は私たちの車七台全部駐車できる程広い。特に台所はステンレス製の業務用設備が備えられ、まるでどこかの飲食店の厨房のような雰囲気である。

高瀬さんが土間で蕎麦をこねて待っていて下さった。座敷を二部屋を開け放してテーブルが用意されている。

揚げたての天ぷらに続いて、そば粉一〇〇%の蕎麦、二八蕎麦と次々蕎麦を茹でて下さるのだが、何せ大勢なのであつという間にざるは空になる。茹で上がる蕎麦がとてもとても待ち遠しかった。

これだけの人数のための蕎麦打ちはもちろん、蕎麦を茹でて続けた下さった高瀬さんはさぞお疲れだったことだろう。

本当に楽しくて美味しい記念礼拝でした。ありがとうございました。

私は、シントウとバジル。私の庭にもバジルはあるのだが、もうとうにひからびている。こはまるで夏の初めのように、またとてもみずみずしい。

ふたたび車に乗って私たちは阿蘇ご夫妻の新

証詞

沖縄から学んだこと

松浦 真理子

沖縄本島の北西部に伊江島という島があります。この島は沖縄戦では全ての悲劇を体験した島であり、戦後の米軍による土地強奪により、今現在も、離島では唯一基地のある島です。伊江島の人々はそれに対し、知恵のあるとても人間的、平和的な戦いを続けてきました。

その中心的人物だった阿波根昌鴻さんは、島に「ヌチドウタカラの家」と「やすらぎの家」から成る「わびあいの里」をつくり、百歳になられる今もそこで暮らしていらつしやいます。私が初めて「里」を訪ねたのは、一九九一年、子どもの頃から参加していた「光の子学園」の園長ご夫妻に背中を押されてでした。戦跡やガマなどを訪ね歩き、いろいろな方々の話をうかがったその旅はとても衝撃的で、私の心から離れなくなりました。

二年後再び訪ねた時に、阿波根さんと共に運動を続けていらつしやる謝花さんから「里」では反戦運動と同時に「平和の生活づくり」もやっていると、いうことをうかがい、「今度は農業実習に来たらいいさ」と言って頂きました。

そして一年後仕事を辞め「これから」を探していた私は、しばらくの一人旅の後、一九九四年の秋から一九九五年一二月まで、「里」でお世話になることになりました。

里での生活は毎日が発見と感動に満ちていて、私にとって、それまで生きてきた二〇数年分に匹敵するほどの一年でした。

私は、沖縄で初めて、基地は戦争から守ってくれるものではなく、戦争を招くものなのだと知りました。伊江島は東洋一の滑走路があったために狙われ、島の真ん中にある城山は、ふもとに日本軍の基地があったために爆撃されました。歴史というのはただ知識として学ぶものではなく、今そしてこれから私たちが生きていく世界をどうすればいいのかを考える時に生かしていくことが大切なのだ、気づかされました。

日本が本当に平和を望み、作り出していこうとするならば、沖縄から教えていただくことがたくさんあります。沖縄はかつて五百年の間、戦争をせず、しかも近隣諸国と貿易を通じ仲良く暮らしてきた歴史を持っています。そして、その後の歴史の中でも常に平和を求め、作り出そうとしてきました。一方日本は、五十五年戦争をしていないというだけで、侵略は今も続けているし、戦争につながることをたくさんしている。全然平和ではありません。こんな日本を変える方法はただひとつ、沖縄やアジアの人々の声を聞き心から受け止めそこから学んで国づくりをしていくことだけだと思います。ところが日本は今も沖縄を犠牲にし続けています。

私は小学校一年生の時に初めて「戦争」を知りました。すごく怖くて、早く忘れたくて、みんなが忘れてくれたらいいのにと思っていました。その時の衝撃のお陰で、戦争を肯定する気持ちは持ったことがないし、沖縄への思いも原点はここにあるとも思う。そう思うと、必要な体験が必要な時に与えられるのかもしれない

が、子どもに伝えることの難しさを感じます。そんな私も、その後広島や韓国を訪ねて知ること、忘れないことの重要性はわかるようになりましたが、それでも怖さが先に立ってしまうようなところがありました。沖縄を訪ねて初めて、体験した方々のつらさ怖さ以上に、痛み哀しみ、そして平和への想い、今を生きる私たちへの励ましなどを感じられるようになり、やっと前へ進めるようになったのです。

さて、里で暮らすまでの私は、必死で「自立」しようとしていました。でも、それよりずっと素敵な生き方を知りました。それは「助け合っで共に生きる」生き方です。これは私のこれからの一生の目標となりそうです。

阿波根おじい、木や草や鶏や、植木鉢や軍手とも話の出来る方でした。一緒に外の仕事をしていると、おじいと言われるのです。「この植木鉢とこの植木鉢は友達だからよー、こうして一緒に置いといてやると、喜んで夜通し話をするさー」。また私たちが鶏たちのまかないに行く時には「鶏たちは、家族だからねー、『やあ、とどくん、元気かい』と言って声をかけてやるんだよー」と言われる。おじいのような言葉たちは、今も私の宝物です。

今年七月にはG8サミット前後の沖縄を味わってきました。でも大切なのはむしろこれからです。辺野古のヘリポート基地建設は、何としてもやめさせたい。知恵も能力もない私ですが、できることをあきらめず恐れず精一杯やっしていきたいと思っています。(二〇月一日)

近況報告

佐々木 迪淳

私は恵泉女学園で教員をしてもう二〇年になります。自分の思考はずい分変わったと思います。いや、そんなには、と思う人もあります。現在、一番楽しいことは生徒といっしょに剣道をしているときです。この部活の顧問を六年前に引き受けて、ちよっとした覚悟を決めました。息子が部活でしか学校との繋がりを持たなかったこと、その部活がアメリカンフットボールという爽快で魅力的なスポーツ。その顧問の鈴木先生の思いを戴いたこと、それで私の気合が入りました。部活がそれほど活発でないわが学校への揺さぶりでした。きわめつけのコーチを探そう。あの笹森先生に紹介していただいた山口民子先生のラブコールに応じて、私は竹刀を握って生徒に混じって稽古に参加しました。部活は学校での大事な居場所です。スポーツという芸術、文化が学校という場しかないこの国の現実で勝利至上主義でない部活を！世田谷でなぜこんなに早く強くなつたか、なぜ部員が多いのか？こんな七不思議に思わず口元が緩みフツツとなります。でも、気づくと私にも誘惑が？試合のメンバーを計算、試合に出る者と出ないものとの格差を埋めない。桜美林を意識してきつい練習を強いる。自分が果たせなかった夢を生徒に託す。そんな時、二・一の初段の大会に初出場。九秒で日大生に私は負けたのです。あれから楽になりました。何か、宮本武蔵になつた気分です。勝とうとするな！

図書紹介

『一匹の羊の教え』

—いま問われる少数者の人権—

今村嗣夫・小暮修也著 一五五頁

日本基督教団出版局 一四〇〇円＋税

隣接する日の出町で、第二最終ゴミ処分場建設の為の強制大執行が昨秋、行われた。反対住民は最後まで守ったトラスト地を、一人またひとり自らの意思で出た。公権力の手が自らに触れられることを拒んでいるかのようにそのニュース映像は見えた。一方、私の住む市でも昨年から、産廃処理工場（RDF施設）建設計画が発表され、安全性や周辺環境に及ぼす影響に対して疑問、不安等を持った市民が、勉強会、調査、署名、陳情、手紙作戦等々を展開した。希望が見えない行政の対応に寝込んで年越しをした人もいたと聞いた年明け、急転直下、市が厳しい条件を出し、業者が撤退する事となった。小さな声でも、上げる事の大切さを実感する出来事であった。もちろん、著者の言う『日本人の同調的伝統』が支配する精神的風土は、地域の中で、運動や自己主張を始めると、どこからともなく出てきてじわりと重くのしかかってくる。しかし、見たこと、知ったことは看過することは出来ない。だから、著者達（共著であるが、このお二人の後ろから多くの発言する著者たちの声が聞こえてくる。）は、「少数者の人権」「平和と責任」というテーマに沿って、失わ

れた人権を回復し、「知らなかった」では済まされない責任を負いつつ行動し発言する道程こそが歴史を生きたと言ふことだと語りかけている。百人町教会がこの三〇年、自らに言い続けた「主体的に生きる」ということでもあると言えよう。先頃、「教育改革国民会議」がその最終報告で教育基本法の見直しを強調し、奉仕活動の「義務化」を打ち出して来た。「改憲を視野に入れた道筋の一つとさせてはならない」。土手に針の穴を開けさせてはならないと一匹の羊は叫んでいる。

特に年若い人々にぜひ読んで欲しい。因みに、本書は明治学院高等学校の副読本として読まれているとのこと。

(もり みよ子)



『メシアは夢か幻か』大庭昭博著 一七六頁

新教出版社 一八〇〇円＋税

マルコ福音書を（ガリラヤ）（旅）（エルサレム）をテーマとする三部に区切り、その中に、人間として、イエスを信じ、イエスに従う「信徒」の主旋律を聴き取り、その変奏曲を二五編の黙想を通して響かせる、美しいユニークな聖書証言。著者の祈りと力が、その言葉から強く豊に迫る。

(本の帯からの引用)

↓(一頁の続き) 限らない。放逸と散漫、自主性を失い、傀儡人間になり下る恐れなしとしない。自主と創造を要求される今日に於いて、私達は今日何を作らねばならないのか。太古生命を得て以来深層に蓄積され、細胞の核に迄組込まれているそのものを内観の対象として内観し、祈りを実践として換骨脱体し、神と瞑合するの外になすべき手立ては無い。

餘白を借りて、中国に次の様な史実がある。始皇帝の統一前は、小国の乱立と興亡。名の示す如く戦国時代と呼ばれたこの時代の小国の国主は、次の如く論ずる論説者に国の政治全般を受け請わせ。即ち論者曰く「如何なる場合も人は人を殺してならない。国の為、民の為の名に於いて他国と他国の民を侵してはならない。国防と云えども武装はしない。国主は民の安穏と生活を第一とする時、国は安泰なり」と、論者と門人と一団となって国政に当たり要処に付いた。着々と実績を上げ国は富み民は平和を喜びに至ったのであるが突然北方からの侵略を受ける羽目となった。論者と弟子の一団は国主と人民全てを国外に脱出せしめ、彼等は城内に止まり、武器を手に行きたくなく生身を以て抵抗し一人残らず滅したのである。正しく仲良く楽しくあろうとした彼等の信念の選択は無惨に終わった。この史実について、今日を踏まえて如何に評価すべきか、皆様と共に考えて見たいものです。ご意見を念願しつつ筆を擱く。

ろばのせなか

今回は、百人町教会創立三〇周年特集を組みました。昨年一〇月二十九日の記念礼拝でお話頂いた掛井五郎先生の証詞の要約と、その後の祝賀会の報告などから、その日の暖かい雰囲気をお届けできればと存じます。また教会員と二世の方々からも、思い出や感じていることなどを書いて頂きました。思い出話やこれからの夢など、まだまだ沢山の思いをお持ちのことと存じますが、紙面の都合で掲載しきれなかった分は、礼拝後あるいは電話など、別の機会に語り合せて頂ければと存じます。

また、墓前礼拝、松浦真理子さんの証詞もご紹介致しました。大晦日の真夜中から元旦にかけてもたれた龍ヶ崎阿蘇農場での礼拝も、参加者全員がこの一年を振り返って思うことと、新年への抱負を語り、大変感慨深く楽しいものでしたが、これは次号にてご紹介することになっております。

今年に入って、一月一四日にもたれた礼拝の証詞では、「ろばの家」の三兄弟が各々の近況や将来の希望などを語りました。自分の力で人生を切り開きつつある三人の姿に、大人達のほうが元氣を与えられました。次の機会には、看護婦さんになる勉強で忙しい津野由布子さんの話も聞いてみたいですね。

今回の「私の目線」は、修養会で早朝に座禅をご指導頂いた、禅の師家でいらっしやる河上明様にお願ひ致しました。

創立以来の会員にも新しい会員にも、それぞれの三〇年があり、教会とは近かつたり遠かつたりする時期がありますが、こうして共に語り合い、時には真摯に激論をかわすことのできる場を与えられていることは、何と幸いなことでしょうか。

それぞれの場でそれぞれに生きて、百人町教会に集うひとり一人の生きていく道に、主の豊かな祝福とお導きがありますように。

(裴 宣恵)

「ろばの家」の三兄弟の証詞の時